

フランス革命におけるパリの民衆 —食糧をめぐる騒擾を中心にして—

松浦 義弘

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました松浦です。いま、フランス革命期の農民にかんする近江先生のたいへん充実した報告を聞いたわけですが、私自身、卒業論文や大学院のはじめの頃はフランス革命期の農民のことをやっております、当時やっていたことを思い出して懐かしく聴いていたわけです。私自身は、最初農民運動から入りまして、修士論文では、ロベスピエールが組織した革命期の祭典で「最高存在の祭典」という祭典があるのですが、それについて書きました。その後、ロベスピエールのことに話をうつしまして、ある程度の期間ずっとロベスピエールについて研究していたわけです。ですけれども、ロベスピエールというのは、もうとにかく研究も多いですし、何を言ったかということもほぼすべてわかっております。もちろん、ロベスピエールが言ったことをどう解釈するかということにかんしては、いろいろやりようがあるのですが、そういうこともあって、数年前からですが、ロベスピエールがどういうふうに捉えられていたのか、とくにパリの民衆がロベスピエールをどういうふうに思っていたのか、一般的にいえば世論ですね。民衆の世論というか、そういうファクターを入れてロベスピエールを見てみたらどうか、と考えるようになったわけです。そういうことで数年前にはじめて長期で1年間フランスに滞在したときに、そういう視点からパリの民衆にかかわる史料を読みはじめました。でも今日はロベスピエールについての話はしません。そうではなくて、それ以来、時間を見つけてはフランスに行って読んできた史料をもとに、フランス革命におけるパリの民衆のことを話させていただこうかな、というふうに思うのです。

本日の報告のタイトルは「フランス革命におけるパリの民衆」、そして副題が「食糧をめぐる騒擾を中心にして」となっています。皆さんがフランス革命と聞いたときに何を思い浮かべるか、いろいろだと思います。人によってはロベスピエールのことを思い浮かべる人もあるでしょうし、あるいは、アンジェイ・ワイダ監督の映画でも話題になったダントンのことを思い浮かべる人もいるかもしれません。しかし、フランス革命史の年表をみてもらえればあきらかなのですが、フランス革命期のさまざまな事件にはパリの民衆が大きく関与しています。たとえば、1789年の7

月14日のバスチーユ牢獄の襲撃、あるいは同じ89年の10月5・6日のヴェルサイユ行進、さらには1792年8月10日のチュイルリ宮の襲撃——これによって王政が転覆したわけですが——、そしてさらには恐怖政治。こういったフランス革命を特徴づける事件といきましょうか、そういう事件を思い浮かべてもらっただけでも、それらの事件は民衆の介入がなければおこらなかった、といっていると思います。民衆の介入があったからこそ、たとえばバスチーユの襲撃があり、そしてその事件がおこった7月14日が現在では、フランス共和国の祝日として、パリ祭として日本でも祝われるようになった。ですからやや極端な言い方をすれば、民衆の介入がなければ現在のパリ祭は日本でもフランスでもなかった、そういうふうにもいえると思います。そういっても差し支えないほど、フランス革命期のパリの民衆運動はフランス革命の進行に決定的な役割を果たしたということなのです。

この点については実は、フランス革命当時から現在にいたるまで、革命史家のだれもが一樣に認めていることです。しかし、民衆運動をおこなった民衆をどういうふうにか考えるか、ということにかんしては、つい最近にいたるまで意見が分かれておりました。とくに19世紀においては、フランス革命期の民衆にかんしてかなり極端な、両極的な見方があった、といっていると思います。

ごく簡単にいいますと、革命的な民衆に対して否定的な見方をとっていたのは、エドモンド・バーク、それからとくにイポリット・テーヌ。こういう人たちは、フランス革命期の民衆は悪だ、革命期の民衆がやったことは悪だ、あるいは革命的な事件をおこした民衆そのものを“canailles”、つまり、訳すと「ごろつき」ということになりますが、そう表現しています。最近フランスのパリ郊外で移民を中心とする「暴動」がおこりましたが、その時内務大臣のニコラ・サルコジという人が、暴動参加者を「ごろつき」といったために、ますます火に油を注ぐことになったということは、新聞やニュースなんかで読んだり聞いたりした皆さんもいると思います。要するに、フランス革命期に暴動をおこなった、民衆運動をおこなった人たちは、犯罪者とか、浮浪者、乞食、そういう社会的落伍者なのだ、というのが、革命期の民衆にたいするイポリット・テーヌたちの見方でありました。

これに対してそれと反対の見方を提示したのが、日本でも『フランス革命史』の抄訳がありますけれども、有名なジュール・ミシュレ、それから、ソルボンヌ大学のフランス革命史講座の初代教授であったアルフォンス・オラルです。この2人はテーヌとはちがってフランス革命期の民衆をポジティブにとらえた、そしてその民衆を表現する場合にも“peuple”という言葉を使いました。これはあえて訳せば「人民」ということになるのでしょうか、非常に一体性をもった、そしてプラスの価値を表現するようなものとして“peuple”という言葉を使ったわけです。

しかしながら、双方ともきちっとした史料調査にもとづいてというよりは、ある程度あらかじめ政治的な見方、フランス革命をどう見るか、という見方をもとに革命的民衆をとらえていたという側面がかなりあった、といっていると思います。その中であってフランス革命の民衆運動研究史上決定的な研究となったのが、20世紀中葉の1959年に出された、ジョージ・リュエデの『フランス革命と群衆』。それから、同じ時期に出されたアルベール・ソブールの学位論文『共和暦2年におけるパリのサン＝キュロット』です。さきほど報告された近江先生のレジюмеにソブール

の文献が若干載ってましたけれども、そういった人たちが、ひじょうに厳密な史料分析にもとづいてフランス革命期の民衆の実体をあきらかにした、とっていいと思います。

ところで、リューデは“people”という言葉は使いませんでした。もちろん“canailles”という言葉も使わなかったのですが。リューデはそれら2つの言葉の使用をさけて、「群衆」crowdという言葉を使っているんです。これはやはり、それまでの見方とはちがう中立的・中性的な見方といえましょうか、要するに「ごろつき」という社会的落伍者をしめす言葉ではなくて、しかし「人民」というような一体性を強調するような概念でもない、民衆の実際の構成そのものを厳密に、厳格に確定しようという意志のあらわれであり、それで「群衆」という言葉を使うことになったというふうに考えられます。

じっさい、リューデがあきらかにしたのは、革命期の群衆がどういう人びとから構成されていたのかという点です。革命期の群衆は、罪人とか放浪者ではなくて、職人や親方、あるいは小商人や商店主であって、しばしば彼らは結婚していて、一家の主人であった、と。そういうことを実証的にあきらかにしたわけです。しかし同時にまた彼は、つぎのようにもいっております。つまり革命的な群衆を蜂起に駆りたてた主要な動機は、安価で豊富な食糧の供給、つまり食糧問題であったということ。そしてこの食糧をめぐる騒擾においては、女性の参加が支配的であったということ、そう指摘しているのです。このリューデの指摘によれば、フランス革命期のあらゆる民衆運動の背景には食糧問題があったと考えていいわけで、食糧をめぐる騒擾をどう理解するか、ということがフランス革命の理解にとってもひじょうに重要だ、ということになります。

そこで今日は、食糧をめぐる民衆騒擾に焦点を当てて話をしたいと思います。まず、フランス革命期の食糧騒擾にはいる前に、その歴史的な、ないしは社会的な背景について少し話をしておきたいと思います。

I パリの民衆運動の歴史的・社会的背景

18世紀というのはじつはパリの膨張期、パリはずっと膨張しているといえれば膨張しているのですが、とくに変化の激しかった世紀、パリの都市化が急速に進行した時期です。それは、パリの地図がこの時期にさかんに更新されたという事実に表現されています。地図というのは、ちょっと考えてみればわかると思うのですが、たとえばパリの領域が変化したり新しい道路ができるということになれば、地図を作り直さなくてはならない。それから18世紀末までは、地図というのは現在のような地図ではなくて、建物を3次元のように、つまりじっさいに見えるようなかたちで描いていた地図が多かったのです。ですから、都市空間が変化したり、新しい道路や建物ができて都市景観が変化すると、新しい地図を製作しなくてはならない。17世紀の終わりからフランス革命までのあいだに100以上のパリの地図が作製されているのですが、10年単位で地図の発行点数を示したのが表1です（資料の表1を参照）。ざっと見てもらえばわかると思うのですが、18世紀のなかばの1760年代ぐらいまではパリの地図の発行点数は10程度で推移しているわけです。ところが70年代には23、80年代には28と、1770年代以後になると地図の発行点数が急増している、ということがおわかりになるかと思いますが。ですからパリは、18世紀の後半に急速な空間的な膨

張、都市化というものを経験したとっていいのです。レジュメの最後のところに革命期のパリ市街図を付けておきましたが、18世紀初頭のパリ市の面積は約1300ヘクタールで、この革命期のパリ市の面積よりもかなり狭いのです。革命期のパリ市の面積は約3400ヘクタールですから、パリ市の面積じたいが18世紀のあいだに2倍以上、3倍ちかく拡張しているということになります。ちなみに現在のパリの面積は革命期のパリの面積の約2倍ですから、パリは19世紀にさらに膨張したということになります。この革命期のパリの市街図の境界は1785年ぐらいにできたもので、「徴税請負人の壁」と呼ばれておりました。この壁のところどころに市門があって、ここを歩いてパリに入るときに「入市税」というものをとられる。要するに人や物の流入・流出をここでチェックすることをやっていたわけです。

ところで、このパリの膨張の背景には、ルイ14世の死後、宮廷が一時的にパリに移ったということがあります。そのために、それまでパリの東部のマレ地区におもに居住していた貴族や役人が、ルーヴル地区やサン＝トノレ地区のあたりに移動するということがおこりました。そして、貴族とか役人とかの金持ちが大挙して王宮の周辺に移ってきて、そこに館を建てるということになったものですから、土地と家賃が上昇いたしまして、本来そこにいたパリの民衆が別の地区に、パリの中心部や東部の方に移動するということになりました。そういったことが18世紀のあいだにおこります。

それでパリの人口なのですが、1789年に60万から70万のあいだの人口数であるとされているのですが、厳密にはわかりません。浮遊人口というか、流動的な人びとが相当いるものですから、それをどの程度に見積もるかとか、さらには史料的な問題もあってなかなか正確にはつかめないのです。けれども、18世紀のあいだにパリの人口は最低でも30パーセントくらいは増加したと考えられています。ただし、このパリの人口増は、自然増によって、つまりパリに住む人びとの出生率が死亡率を上回ることによって生じたものではありません。この増加は、地方からパリに流入してきた移入民の結果であると考えられます。このパリに流入する移入民の動向を警察も躍起になって把握しようとするのですが、ひじょうに把握が困難なわけです。しかし現在までの研究成果によると、1750年から1790年までのあいだ、かなり大雑把な数字ですが、毎年7000人から14000人くらいの人びとがパリに入ってきているのではないかと、というふう考えられています。そしてこの移入民のパリ人口に占める割合は、さまざまな要素を考慮すると、最低で33パーセント、最大で60パーセントと算定されています。

それでは、地方からパリに流入してきた人たちは、パリのどこへ入ったのでしょうか。史料として配布した「革命期のパリ市街図」を見てもらうといいかと思うのですが、まず斜線を引いた部分のパリ中心部、それからゴブラン織りの工場の辺りを中心とするフォブール・サン＝マルセル、セヌ川をはさんでその対岸に位置するフォブール・サン＝タントワヌ、いずれもパリの東側のフォブール、かつて城壁の外に位置していた地区です。そしてパリの北の諸県から入ってきた人たちは、パリの北西部に入っていったというふう確認されています。

ですから、革命直前のパリは、18世紀のあいだの変化を反映するかたちで3つの地区に区別されると、大雑把には言っていると思います。ひとつはパリの西部です。地図でいうとシャンゼリゼ通り、あるいはフォブール・サン＝トノレ街の向こうに広がるモンソーの丘、それからフォブ

ール・サン＝ジェルマンですね、この辺りが貴族、金持ちの地区になります。1790年のデータだと、貴族の6分の5がこのパリの西部地区に居住しているということになっています。それが第1の地区、金持ち地区です。

第2の地区はパリの中心部、地図の上では斜線を引いた部分です。このパリの中心部では、民衆とブルジョワが共存しているというかたちになっています。ここでは、狭い建物の1階にブルジョワの人たちが住んでいて、その上層階に民衆階層の人たちが住んでいるというかたちになっています。道もひじょうに狭くゴミゴミしていて、建物じたいもあまり良くありません。老朽化した古いパリです。人口密度からいうと、とくに塗りつぶした部分では、1ヘクタールあたり800人以上、場合によっては1ヘクタールあたり1300人などという地域もあって、最低でも1ヘクタールあたり500人住んでいるという、そういう地区です。

そして第3の地区が、パリの中心部の東側に位置する地域、さきほどふれたフォブール・サン＝マルセルとフォブール・サン＝タントワヌという民衆地区で、民衆運動の担い手を生み出した典型的な地域です。ここはパリ西部と同じような人口密度で、1ヘクタールあたり100人前後あるいはそれより低い、そういう地域です。現在のパリには公園以外にはほとんど空間というか、空き地はありませんけども、革命当時だと中心部をのぞいてかなり畑とか農地がありました。とくにパリの東部の方はそういう景観が支配的であったといえます。

つぎに、民衆の富というか、民衆の財産が18世紀にどういふふうになっていったのか、ということを見てみたいと思います。民衆というパリではとくに召使いが無視できない比重をもっているんですが、ここではそれは外しまして、賃労働者の平均財産がどのくらい変わっていったのか、ということを見てみたいと思います。賃労働者の平均財産の変化をしめた表2をみてください。世紀前半と世紀後半の平均財産を比べたものですが、いちばん上の数値は名目的な財産額です（資料の表2を参照）。しかしその間に物価の上昇とかがありますから、それを小麦の平均価格で算定し直したのがその下の数値です。さらに日雇い賃金でもって算定し直したのがその下の3行目の数値でありまして、それを見ていただければ18世紀のあいだに賃労働者の平均賃金は、小麦価格換算で81パーセント、日雇い賃金換算で59パーセント、それぞれ増加しているということがわかります。

それでは、賃労働者の財産はどのいふふうに分布していたのでしょうか。それを示したのが表3です（資料の表3を参照）。この表も表1と同じく世紀前半と世紀後半を比較したものです。ここで財産というのは、賃労働者が死後に残す遺産目録、それを史料として算定したものです。500リーヴル以下の財産しか残せなかった者、そして500～999リーヴルの財産を残した者、1000～2999リーヴルの財産を残した者、そういうふうに分けまして、そのパーセント、100中何人がそれぞれの区分の中に入るのかということを表で示したものです。1695-1715年で500リーヴル以下の財産を残した賃労働者は60パーセントとなっていますが、いちばん頻度の高いのは、じつは200リーヴルから300リーヴルぐらいの財産、そのあたりがいちばん賃労働者の財産で頻度が高いところなのです。60という数値からもわかるように、3分の2近い賃労働者が、500リーヴル以下の財産しか残せないかたちで死亡していたわけですね。この事態は革命前夜の1775-1790年でもあまりかわらなくて、賃労働者の半数以上がこの数字を越えないわけですね。ですから、賃労働者の賃

金の変化と賃労働者の財産の最頻値分布の変化を比較しますと、賃労働者全体の富は18世紀をとおして増加しているわけですが、しかしその増加は、賃労働者のうちの上層階層の富裕化によって実現されているわけです。とくに表2で3000リーヴル以上の財産を残した賃労働者の割合に注目しますと、世紀前半には5パーセントだったのが、革命直前には23パーセントに増加しています。ですから、18世紀をとおしてもっとも恵まれない賃労働者ともっとも裕福な賃労働者のあいだの格差が拡大したとっていいと思います。

ここでもっとも恵まれてる金持ちの賃労働者というのは、ギルドに属している熟練職人です。逆に恵まれない労働者というのは、日雇い、単純労働に従事している未熟練労働者です。両者の格差がひじょうに増大している。具体的に数値をあげますと、金持ちの賃労働者は7～20パーセントほど財産が増加しているのですが、しかし恵まれない賃労働者の場合には逆に30～40パーセント財産額が減少している、そういう結果になっています。つまり18世紀のあいだに金持ちはより金持ちになるけれども、貧しい人たちはますます貧しくなる、だいたい賃労働者の3分の2は相対的に貧困化したというふうについていいと思います。ただし、それら貧しい賃労働者がずっと貧しいままに何もしなかったのかというと、けっしてそうではなくて、この1世紀のあいだにいくつかな変化が認められます。相対的に貧しくなったんだけれども、新しい動きも同時に認められるのです。

まずひとつは衣服です。衣服の消費が貧しい賃労働者の場合も増えているということがあります。持っている衣服の点数がだいたい倍くらいになっているのです。それに所持している衣服も生地が軽くなったり、色彩とか模様が派手になったり、あるいは画一的なものだった衣服に少し個性が見られるようになる、そういった変化が見られるようになるのです。

それから食事の変化、とくに肉の摂取です。17世紀までは民衆は肉をあまり食べなかったのですが、18世紀になりますと、肉の消費がある程度一般化してきます。それから、これは賃労働者でも召使いでも20パーセント程度にすぎないのですけれども、コーヒーとか紅茶を飲む人たちが出てくる、とうぜん砂糖も使うようになります。食事の基本はパンとワイン、それにサラダ、インゲン豆、少量の肉、トリップ、それからチーズです。こういったものによって食事に変化をつけるようになってくる。ただし、民衆の食事はひじょうに柔軟です。金がないときは、基本的にパンとチーズにとどめる。しかし少し余裕ができれば、今あげたようないろいろなものを加えて食事に変化をつけるということをするわけです。

さらに、貧困化というのと矛盾するように見えるかも知れませんが、居酒屋の頻繁な利用というのも特徴です。パリの民衆は年間約100日、居酒屋を利用しています。これはなぜかということですが、居酒屋に行っても金がないと質素に、パンとチーズ、ワインを軽く飲むぐらいですませるといふこともあるのですが、それと同時に、居酒屋で、いわば富が再配分されるということもあったのです。つまり、羽振りのいい賃労働者と貧しい賃労働者とがともに居酒屋を利用するなかで、たとえば羽振りのいい賃労働者が金のない賃労働者におごるとか、そういうこともあって貧しい賃労働者もなんとかやり繰りできていた。ひじょうに濃密な人間関係を背景として、そういうことが成立していたようです。

それから、人びとが暖かさを求めるようになった。人口増加率に比べてはるかに木の利用の増

加率が高いのです。パンを焼くにしろ仕事をするにしろ木がなければ駄目なわけですが、それに加えて暖房の燃料としての木の需要が急増するのです。ですから木はものすごい必需品で、木が欠如すると、それを理由に騒擾がおこるといこともたびたびありました。

そういうことで18世紀という1世紀間を経済的な観点で見ますと、世紀前半から世紀後半にかけて生活費は62パーセント上昇しましたが、しかし民衆の平均賃金は25パーセントしか上昇しませんでした。要するに賃金が生活費に追いつかないんです。とくに家賃の上昇が130～140パーセントと大きくて追いつかない。ですから、パリの民衆が貧困から脱出するということはかなり困難であった、そういうふうについていいと思います。

II フランス革命と食糧危機

冒頭でのべたように、食糧危機は、フランス革命期の民衆運動とその急進化の最大の要因でありまして、フランス革命の進行に決定的な影響をあたえました。では、食糧危機というのはどうかたちでおこるのでしょうか。

ひとつは天候不順による凶作です。さきほどの近江先生の話にもありましたけれども、革命直前の1787～1788年の干ばつとか雹とか霜とかのために1788年は凶作で、その結果1788年から89年にかけて穀物価格とパン価格が高騰します。通常の年ですと、家計にしめるパンの費用＝食費の割合はだいたい50パーセントなのです。そして家賃が25パーセント、衣料費が10パーセントから15パーセント、そして光熱費その他が10パーセントから15パーセントです。ところが、1788年の凶作のために1789年の7月にかけてパンの価格がどんどん上がっていきます。そしてエルネスト・ラブルースという歴史家の算定によれば、1789年の5月には、家計にしめるパンの支出が88パーセントまでいっきに増えるんです。つまり、家計がほとんど食費によってしめられてしまうという事態になります。そうしますとどうということになるか。他の支出費目を切りつめなくてはいけなわけです。いちばん切りつめやすい費目は何かといいますと、衣料費です。手持ちの衣料で我慢して、新しい衣料を買わないで何とかやりくりしようとしてします。そうしますと、衣料が売れなくなりますから、繊維産業に従事している労働者が解雇されるということになりまして、そういう人たちが仕事がなくあぶれます。凶作でほんらい収穫や脱穀にたずさわるはずの農業労働者が仕事がなくあぶれているうえに、そういうかたちで失業者、放浪者が増えますから、社会不安が高まります。そしてこれが民衆運動の背景となってゆく。フランス革命期にはほかにも1794年から95年にかけての冬が厳しい冬で、そのために農作物があまりとれなくて食糧危機が深刻化します。天候不順による凶作、これも食糧危機、さらには経済危機や社会危機のひとつの要因です。ちなみに、アンシャン・レジームから19世紀のなかばぐらいまでの時期ですと、経済恐慌は農業面での凶作が引き金になって工業面での不況に波及するというかたちをとります。これは「古い型の経済危機」といって、19世紀後半以後の経済危機とはその発生メカニズムがちがいます。19世紀後半以後の経済恐慌の場合は、たとえば1929年の世界恐慌が典型的ですが、工業面での過剰生産が引き金になって恐慌が発生するわけですから。

このように、天候不順による凶作によって経済危機がもたらされるという点は革命期も同じな

のですが、それだけではなくて、革命期、とくに1789年から1796年にかけては、革命の展開そのものによって食糧品の不足と価格高騰がもたらされたという側面があります。ひとつは革命戦争です。フランスは、1792年の4月20日、オーストリアにたいして宣戦布告し、対外戦争に突入していくこととなります。この戦争は革命の急進化とおおいに関係しますが、食糧不足と価格高騰をもたらしたという点でも無視できません。戦争になれば、軍隊に武器だけでなく糧食を供給するというのが大きな課題になるわけで、そのために、糧食の徴発がなされたり、一般住民への食糧供給が犠牲になるということが出てきます。また、戦争によって西インド諸島産品の輸入が途絶したことも見逃せません。その結果として食糧不足、さらには食糧の価格の高騰が生じました。

それからもうひとつは、アシニャ紙幣の大量発行。1789年11月に教会財産が国有化され、それを担保にアシニャ紙幣が発行されるのですが、最初はいいのです。しかし、しだいにアシニャ紙幣の発行部数を増やすということをやっていくと、当然のことながら貨幣の流通量が増えるわけですから、インフレーション＝価格高騰がおこり、消費者の購買意欲が減少するということになります。さらに、どんどん貨幣価値が下がっていくわけですから、農民たちはアシニャ紙幣と自分たちの生産した農産物を交換することをいやがるようになります。ということで農産物が市場にでてこない、これもとうぜん食糧の不足と価格高騰につながっていくこととなります。

もうひとつあげますと、パリに食糧を供給する周辺農村とのあいだのコミュニケーションといましようか、交通がうまくいかないということがあります。道路とか橋とか運河なんかの維持管理がうまくいなくて、劣化したりして、流通がうまくいかない。これも食糧の不足と価格高騰の原因になりえることは、ご理解いただけるものと思います。

以上のようなことがあって、フランス革命期には食糧危機が1789年から1796年まで、ほぼずっと続くのです。1790年は比較的よいのですが、それ以外の年はつねに食糧問題に悩まされるということになります。そしてじっさい、この食糧危機を背景として民衆運動がおこるわけです。1789年7月のバスチユ監獄の襲撃と占領、それから同じ年の10月5～6日のヴェルサイユ行進、どちらの事件の背景にも深刻な食糧不足があったということがわかります。7月には入市税門を襲撃してパン価格を下げようとする動きがみられますし、10月のヴェルサイユ行進のさいには国王一家が「パン屋の主人とその女房と小僧」と形容されたのですから。それから、1792年冬から1793年夏にかけても食糧危機で、それを背景として1793年2月24日から2月26日にかけてパリで婦人たちを中心とする群衆が食料品店や倉庫を襲撃しています。そして1793年の9月4～5日にも、パリで食糧不足を背景とする民衆蜂起がおこります。その結果、9月9日には食糧の調達を目的とする「革命軍」が創設され、さらに9月29日には生活必需品の上限価格と最高賃金を定めた「総最高価格法」が成立するということとなります。さらに、1795年の4月から5月にかけて、パリの民衆は、「パンと93年憲法」をスローガンにして二度にわたって立ちあがります。この「パンと93年憲法」というスローガンをみても、食糧不足、価格高騰というのがその蜂起の背景にあった、ということがわかると思います。

Ⅲ 1793年9月～1794年3月の食糧騒擾

今日とりあげる具体的な史料は、1793年末から1794年の3月にかけての食糧騒擾にかんするものです。この時期には、年表を見てもらえばわかるように、食糧不足が原因であることがはっきりしている大規模な民衆運動というのはありません。しかしながら、当時の治安・警察当局の史料=報告書のみをみますと、その大部分が食糧問題とそれをめぐる騒擾によって支配されていることがわかります。報告書によっては、報告の項目が<Subsistances>と<Esprit public>に分かれています。<Subsistances>というのは〈食糧〉、<Esprit public>というのは〈公衆の精神〉といいますか、〈公衆の気持ち〉、あるいは〈世論〉に近い意味だと考えてもらっていいのですが、要するに報告書の半分は食糧の問題に当てられているわけです。しかも、<Esprit public>の項目でも食糧をめぐる騒擾などにかんする報告もなされていますから、食糧問題は、治安・警察当局にとって最大の関心事であったことはまちがいありません。

それではいったい、この時期にどういう食糧騒擾がおこっていたのでしょうか。それを具体的にしめす史料をひとつあげておきました。1794年の2月末に内務省の委員が内務大臣に提出した報告のなかの一節です。

中央市場の近くに着いて多くの女たちの行列が見えたとき、わたしはなんと驚いたことだろう。その行列は、モンオルグイル通りの中ほどまで伸び、それぞれが生活必需品の配給のために順番を待っていた。それ〔彼女たちの声〕は叫びではなく吠え声、というよりもむしろ恐ろしい怒号だった。反革命の状態にあるパリでもそれほどぞっとする光景は見られまい。彼女たちは食糧の配給を得ようと争うのではなく、〔配給場所に〕到達する権利を得ようとお互いに争っていたのだ。私の前にいた何人かの女たちは足で蹴られこぶしで殴られ、行列の外に投げ出され、ドブに投げ込まれた。ほかの女たちは声高に蜂起を叫んでいた。じっさい志願兵や騎馬警察が到着しなければ蜂起はおこっていたことだろう。

この史料は、パリ中心部に位置する、パリ最大の食糧品市場である中央市場の周辺でほとんど日常のおこっている騒ぎにかんする報告なのですが、食糧を手に入れるための女性同士の争いがどのようなものであったのか、その一端がご理解いただけるかと思います。この時期には、こういったたぐいのいざこざが、パリ中央市場や、パン屋や商店の前でしょっちゅうおこっていました。治安・警察当局もひじょうに神経質になっています。というのも、食糧不足や価格高騰はそこにとどまらないで、政治的意味をもってしまうからなのです。つまり18世紀当時においては、食糧不足とか価格の高騰は、天候不順による凶作の結果だとは民衆は考えないんです。民衆というよりかなり一般的に知識人のレベルでもそういうふうには考えない。そうではなくて、たとえば、敵の陰謀による人工的な飢饉だとか、あるいは金で雇われた悪人がいろいろ画策して穀物の高騰を引き起こしているとか、あるいは金持ちが自分のエゴイズムで買い占めをやったり、

高くなるのを待って貯蔵したりする結果として穀物やパンの価格が高騰しているのだ、そういうふう一般の人たちは考えるわけなんです。その結果として、食糧不足や価格高騰の責任者として想定された「敵」や「金持ち」などにたいする襲撃なども生じかねないのです。

ではいったい、食糧をめぐる民衆騒擾の意味というか、メッセージはどこにあったのでしょうか。食糧をめぐる民衆の騒擾というのは、じつは18世紀をとおしてありますし、もちろんその前にもあるわけですから、長期にわたる歴史的な経験にもとづく価値とか、振る舞い方みたいなものが継承されているという側面も強いと思うのです。史料からメッセージがはっきり読み取れるところだけをとりあげてみたいと思います。

ひとつは、なんと表現していいかわからないですが、あえていえば生存への意志というか、生存権の表明というか、そういうふうについていいようなメッセージです。たとえば、以下にあげる史料に表現されているようなメッセージです。「カフェや集団や広場や市場のいたるところで、われわれを脅かしている窮乏だけが語られている。いまやギロチンは恐れられていない。飢えで死ぬのもギロチンで死ぬのも同じことだ、と〔民衆はいつている〕。」これは1794年2月末の報告なのですが、もうひとつ例をあげますと、ひじょうに深刻な食糧不足というものを背景にして「こんな状態で生きているよりは死んだほうがいい」ということをかなりの民衆が言っているという、こういう報告もあるのです。これは1794の3月上旬の報告のなかに出てくるのですが、こういうふうな言葉が民衆の口から発せられていました。

それから、お金や利益にたいする軽べつ、金持ちにたいする嫌悪というメッセージがうかがえる史料があります。その例を紹介します。

ある女八百屋がたったいま買ったばかりの並の品質のキャベツを一個20スー [=1リール：当時の未熟練労働者の日給に近い金額] であえて売ろうとしていた。それらのキャベツを彼女に売った荷車引きは、彼女の仕入れにたいする儲けを知りたくて、数分後この女の店のまえにふたたびやって来てキャベツの値段を問い合わせた。すると20スーで売っていたよといわれた。『何だって！この女は、俺が一個たったの6スーで売ったキャベツをずうずうしくも20スーで売ったというのか』そのような搾取を知って当然のことながら怒った民衆は、その女八百屋の店を取り囲み、衛兵が呼びにやられた。そして彼女はすべてのキャベツを原価で買い手に渡さざるをえなかった。

その後、この史料にでてくる「民衆」はこんな処罰じゃわれわれは納得できないという不満を表明しているのですが、とにかく「民衆」は、儲けようとした女八百屋にたいして、利益なしで売るように圧力をかけ、そうさせたということです。それからもうひとつ、金持ちにたいする嫌悪というか似たようなメッセージを伝える史料があります。「百にたいして百以上もうけるエゴイストや大商人についてあらゆる集団で不平がいわれている。」要するに、利益を出そうとするエゴイストや大商人、こういう人びとにたいして不平がでてきているということです。これは1794年の3月はじめの史料です。

ほかにももう少しいろいろ言えそうな史料もあるのですが、はっきりしているところだけ2点

あげました。生存への意志というか、生存権の要求。それから、金持ち、お金や利益に対する軽べつ、あるいは金持ちにたいする嫌悪。そういうメッセージが、上にあげた史料における民衆の言葉には表現されているといえると思います。それでは、この食糧をめぐる騒擾やそこにみられる政治的メッセージがどういう政治的結果を、あるいは政治的意味をもったのか、ということを経最後に少し見てみたいと思います。

IV 食糧騒擾と政治的意味

さきほども指摘しましたがけれども、食糧不足や価格高騰というのは天候不順のせいではなくて人為的な策謀の結果であると、要するに、誰かが意図的に食糧不足や高騰をひきおこしているんだ、と当時の民衆は考えているわけです。ですから、その責任者というか、そういうふうと考えられた穀物商人とかパン屋とか、あるいは金持ちや貴族なんかが攻撃の対象になるというのはわかると思うんですが、場合によっては、当局、革命のこの段階（1793～1794年）では国王ではなくて議会、つまり国民公会とか、あるいはパリの場合であればパリ市にたいして批判的な言葉をのべる、あるいは圧力をじっさいにかける、といったことがとうぜん生じます。それからさきほどちょっとふれましたけれども、1793年の9月4・5日の蜂起によってじっさい当局に圧力をかけ、その結果として「革命軍」が創設され、「総最高価格法」が日程にのぼり成立するということがあります。しかしそれだけではなくて、食糧騒擾のなかで表明される民衆の価値観というか、ものの見方というものが、革命期の政治指導者の人気や失墜とおそらく相当関係しているのではないかということがいえます。これはロベスピエールのような政治指導者についてもいえるのですが、とくに「エベール派」の世論における地盤沈下を例にとってみてみたいと思います。

1794年の3月24日にエベール派の処刑があります。このエベール派の逮捕は、ちょうどその10日前の3月13日から3月14日にかけての夜でした。しかしながら、エベールが逮捕され、処刑される以前に、その世論における評判はかなり落ちているのです。それでは、なぜエベール派が世論において地盤沈下していったのか、ということなのですが、最初エベール派というのはたいへん民衆に人気が高い、民衆の要望を政治の場で表現するという役割をはたして、ある時期まではひじょうに人気が高いのです。ところがその人気落ちてゆく、権威を失墜していくということになるのです。そのきっかけになったのは何だったのかというと、まずさきほどふれた民衆の金銭への軽べつがおおきく関係していると思われるのです。具体的にいえば、ダントン派とされているカミーユ・デムランという政治家が『ヴィユー・コルドリエ』という新聞を出しているのですが、その新聞の第五号の発行後、世論におけるエベール派の地盤沈下が急速に進行しているのです。それではいったいこの第五号の内容とはどういうものなのかというと、それは、エベールが当時の陸軍大臣のブショットという人物から不当な金をもらい、その金をもらったためにブショットにおべっかを使ったという、そういう記事です。この記事が出て以降、パリの民衆の口から、「もらった報酬の見返りとしてのパトリオット」「金のためのパトリオット」「金で雇われた民主主義者」「彼 [=エベール] のパトリオティズムは高くつきすぎる」、エベールに対するそういう辛辣な言葉がどんどん出てくる。同じ時期に、じつはマラについて民衆が発した言葉が

あるんですが、それはエベールにたいする民衆の辛辣な表現とは対照的なものです。民衆はエベールと対比して、「この立法者マラは有徳だった。なぜなら彼は貧しくして死んだからだ。彼は国民の金を横領しなかった」といっているからです。ですから、金銭、とくに不当な金銭を得るということにたいする軽べつ、その民衆の価値観に反することをエベールはやったということになったわけです。これは事実かどうかわかりませんが、すくなくとも民衆はそう思ったわけです。こうしてエベールやエベール派の人氣がいききに低下してゆくことになります。それが第一です。

それから第三に、エベールが不当な金をもらったという言説がそのようなかたちで出ますと、ただちにエベールが金持ちの振る舞いをする、あるいはエベールが金持ちの振る舞いをしようとしているという言葉が民衆のなかに発生するんです。時間的に余裕がないので、これは史料をあげて説明することができないのですが、そういうことがおこります。それはエベールだけではなくて、ほかの政治家にかんしてもそういうことがおこるのです。要するに、成り上がったこと、金をもらって成り上がったこと、それはけしからんということですよ。しかも、成り上がりたにたいする軽べつはそれにとどまることがない。つまり、エベールやエベール派が不当な金をもらって金持ちに成り上がった、あるいは金持ちのような振る舞いをする、そういうふうな言説が出てくると、こんどはエベール派が「陰謀」と結びつけられるようになるのです。史料からひとつだけ例をあげておきます。

五人の私人がいわゆるイタリア大通りで座り、輪になってコルドリエ派とジャコバン派について語っていた。そのうちのひとりがいった。『現在までに存在したもっとも恐ろしい陰謀は、…おそらくエベール、ヴァンサンとその一味の陰謀だ。まずこの最初の人物 [エベール] の行動を革命開始の時期からいそいでたどってみよう。この時期以前に彼はなんだったんだろうか。金で雇われた男だったんだろうか。どのようにして彼は出世したのだろうか。陰謀によってだ！なにが彼を派手にしたのか。陰謀だ！なにが彼の妻に、彼女がサン＝キュロットを前にしてしめす口調、贅沢、傲慢な言動をあたえたのか。彼女はかつて街なかでサン＝キュロットの後を一步一步追っていたのに、いまや二頭立ての四輪馬車のようなものでサン＝キュロットに贅沢をひけらかしているが。やはり陰謀だ！』

こういうことが民衆の口にのぼっています。つまり、かつて貧しかった男が、成り上がって金持ちになり、金持ちのような傲慢な口調で話し、贅沢をひけらかすこと、それは、パリの民衆の価値観に反すると同時に、「陰謀」によってしか説明しえないものであったのです。またそれは、当時の「革命政府」がエベール派を粛清するさいに、エベール派の「陰謀」という説明をその理由として持ち出すのですが、その政府の「陰謀」という説明が、民衆によって受容される背景となっていたといえます。逆に、一般の人びとが逮捕されたり「陰謀家」とされたりすることになると、そこにはただちに、彼らは貧しかったが金持ちになったとか、金持ちのような振る舞いをする、といったような民衆の言説がしばしばともなうということもあったわけです。こうして、

エベールやエベール派にかんして民衆の価値観に合わない情報というものが流れることによって、エベール派の人气が下がり、さらには「陰謀」にむすびつけられる。いまあげた「陰謀」以外にも、エベール派は、「王妃 [マリ・アントワネット] を奪う陰謀」に加わったとか、関与していたとか、あるいは民衆にとってひじょうに重大な関心事である飢饉、食糧不足というものを引き起こしているのはじつはエベール派だと、そういうふうなかたちで「飢饉の陰謀」にも結びつけられたりするということがありました。その結果、エベール派は1794年3月24日に処刑されるということになる。民衆のなかにはそれに反対するものももちろん若干いたのですが、圧倒的多数の民衆は、エベール派の処刑をむしろ積極的に受容し、あるいは要求するということになったのです。

ちょっと話が長引きましたけれども、以上で私の話を終わりたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

参考文献

- Caron, P., *Paris pendant la Terreur*, 6 vols., Paris, Picard & C. Klincksieck, 1910-1964.
- Nicolas, J., *La Rébellion française : Mouvements populaires et conscience sociale 1661-1789*, Paris, Seuil, 2002.
- Roche, D., *Le Peuple de Paris*, Paris, Fayard, 1998.
- ソブール (井上幸治監訳) 『フランス革命と民衆』新評論, 1983.
- リュージェ (前川貞治郎/野口名隆/服部春彦訳) 『フランス革命と群衆』ミネルヴァ書房, 1983.
- 松浦義弘 『『ジェルミナルのドラマ』とは何だったのか——革命政府とパリ民衆——』
『Study Series』(一橋大・社会科学古典資料センター) 53, 2005.
- 『フランス革命期のフランス』柴田三千雄他編『世界歴史大系 フランス史2』山川出版社(所収), 1996

資料

1700-1709	10
1710-1719	7
1720-1729	4
1730-1739	11
1740-1749	8
1750-1759	8
1760-1769	14
1770-1779	23
1780-1789	28
1790-1799	19

表1 バリの地図の10年ごとの発行点数

	1695-1715	1775-1790
平均財産	776L	1776L
小麦平均価格／ステイエ	18L6	23L6
小麦換算	41,7	75,25
増加率		81%
日雇賃金（一日）	17s5	25s
日雇い日数換算	886日	1420日
増加率		59%

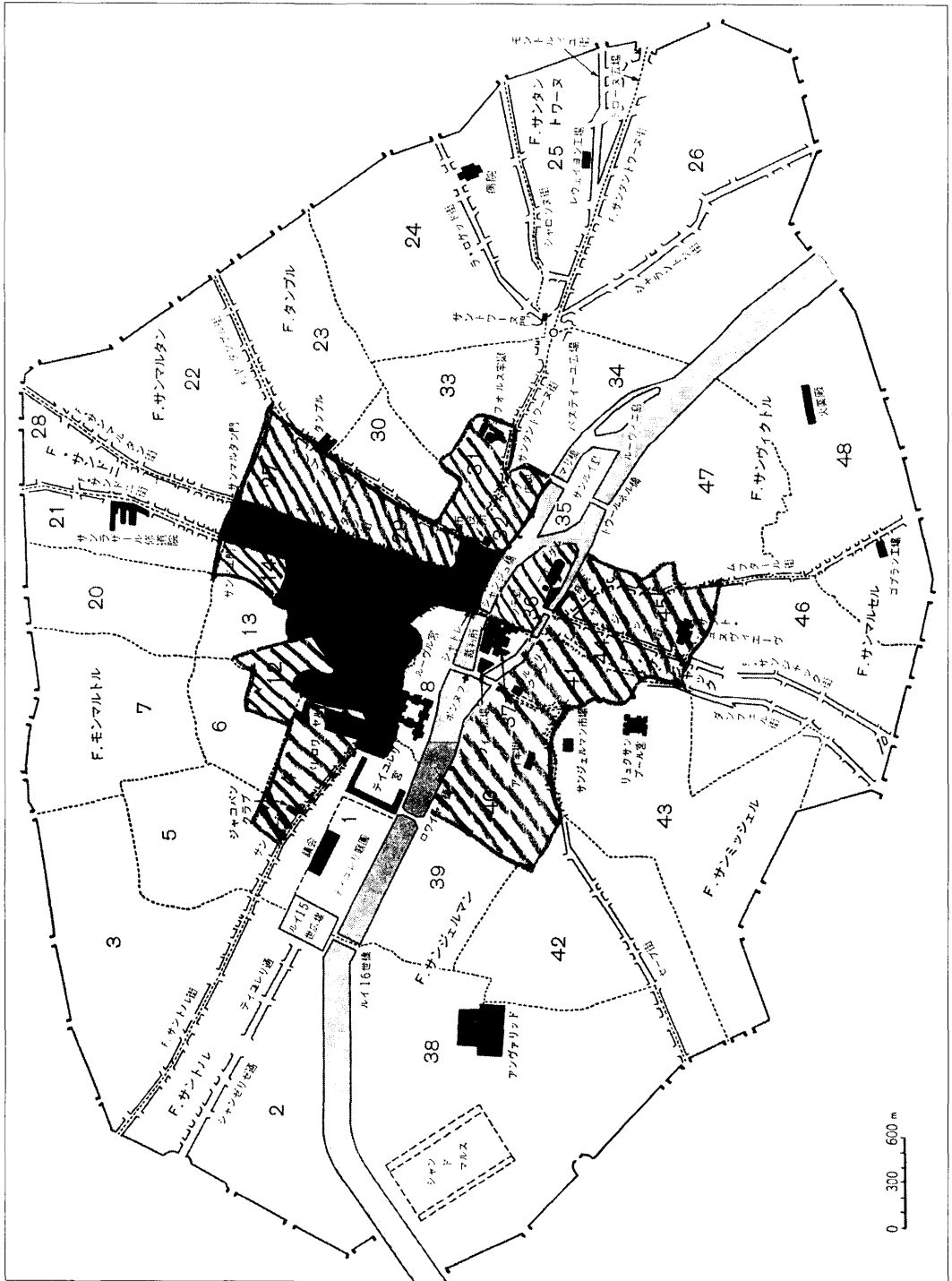
表2 賃労働者の平均財産の変化

	1695-1715	1775-1790
500L以下	60	50
500-999L	23	13
1000-2999L	12	14
3000L以上	5	23

表3 賃労働者の財産の最頻値分布

出典はいずれも、Roche, D., *Le peuple de Paris*, PP. 22, 104.

革命期のパリ市街図



リュエデ (前川貞次郎/野口名隆/服部春彦訳) 『フランス革命と群衆』(ミネルヴァ書房、1983年)